70. 食道静脈瘤に対する肝シンチグラムの有用性について

広島大学　第一内科
中西　敏夫　吉田　桂一　川上　広育
三好　秋馬　国政　徹明　相光　汐美
山岡　義文

〔目的〕 慢性肝疾患においては食道静脈瘤の存在が高頻度にみられる．今回我々は肝シンチグラム所見上よりその存在が推定可能か否かについて内視鏡所見と対比して検討した．

〔検査対象及び方法〕 腹腔鏡，肝生検等により診断の確定した慢性肝疾患患者に食道X線検査及び食道鏡検査を行うとともに ^{198}Au コロイド 300 μC 静注しシンチカメラにて肝シンチグラムを得た．

〔成績〕 シンチグラムでの肝の形態，脾影骨髄影と食道静脈瘤を内視鏡的に瀬底等の分類に従って分けた程度との関係をみると，肝右葉が萎縮し左葉の肥大している症例では11例中10例に，右葉が萎縮し左葉が正常の症例では2例中1例に，右葉左葉ともに肥大している症例では7例中3例に，右葉が正常で左葉肥大の症例では6例中2例に食道静脈瘤の存在を認めた．脾影からみた食道静脈瘤の頻度は脾影のあるものでは23例中15例に，脾影のないものでは10例中2例に食道静脈瘤を認めた．骨髄影からみた食道静脈瘤の頻度は骨髄影のある症例では11例中10例に，骨髄影のない症例では22例中4例に食道静脈瘤を認めた．以上より肝シンチグラム所見における肝の形態又び脾影，骨髄影の有無とその程度とにより食道静脈瘤の有無並びに程度が推測出来る結果を得た．

71. 小児の右上腹部腫瘤の診断における肝 Scintigraphy の意義

兵庫県立こども病院　放射線科
西山　章次
神戸大学　放射線科
松尾　導昌

兵庫県立こども病院で経験した右上腹部腫瘤症例について，肝 Scintigraphy の診断的意義を血管造影法と比較して検討した．

〔方法〕 対象は原発性肝癌，肝嚢腫，後腹膜腔悪性嚢腫，慢性肝炎，von Gierke 病，総胆管嚢腫等である．使用核種は総胆管嚢腫のみ ^{131}I Rose Bengal を用い，他は ^{198}Au colloid を用いた．

〔結果〕 原発性肝癌：肝内に境界不整の明瞭な欠損像を認める．

肝嚢腫：肝右葉に広範な欠損像を認めるが境界は鋭利で，右側面像では肝を下方より上方へ圧迫する．

後腹膜腔悪性嚢腫：肝右葉に明瞭な欠損部があり，右側面像では肝を後方から前方へ圧排する像が得られた．

慢性肝炎：肝内に欠損像はみられず，軽度の変形と腫大があり，脾腫が著明である．

von Gierke 病：欠損部はみられず，肝のびまん性腫大があり，僅かな脾像がみられる．

総胆管嚢腫：^{131}I-R. B. を使用した．20時間までには認められなかった嚢腫像が24時間後に明瞭に出現した．

〔考按〕 肝 Scintigraphy で確定診を下しえたものは原発性肝癌，総胆管嚢腫で，他はいずれも疑診に終った．しかし胆道造影不成功であった総胆管嚢腫をこれにより確診しえた点，慢性肝炎，von Gierke 病で Space occupying lesion を否定しえた点に意義がある．一方血管造影は総胆管嚢腫を除く全例に施行したが，全例で発生部位，拡がりを明らかに示し，各疾患の特徴ある血管像を呈して良悪性の判別から，あるものでは病理診断をも推定しえた．現状では，小児腫瘍診断における形態学的 RI 検査の価値は血管造影法に比し著しく低い．これは一つには対象が2,3才以下が主で，臓器の大きさに比して装置の解像力が不充分なこと，呼吸を含む体動の影響が加わるためと思われる．しかし侵襲の少い点は小児においては大きい長所で，今後装置，方法の改良により将来の発展をのぞみたい．

Presented by Medical*Online